

小説エノケン——森下節——読売新聞社





著者紹介＝もりした・せつ

本名、裕。大正9年3月、北海道夕張市紅葉山出身。新聞・雑誌記者等を経て作家生活にはいる。日本文芸家協会会員。文芸同人雑誌「藝文」主宰。著書に『ヨ・ボヨマーチ』『小説 山交事件』『町会長物語』その他がある。
(現住所＝東京都町田市原町田 1-28-6号)

小説 エノケン

昭和四十六年四月十日 第一刷

著者＝森下 節

発行者＝二宮信親

発行所＝読売新聞社

東京都中央区銀座三の二 一
〒104
大阪市北区野崎町七七 二
〒530
北九州市小倉区明和町二の二
〒803

印刷所＝凸版印刷株式会社

製本所＝協和製本株式会社

定価 六〇〇円

小説エノケン
目次

落日の幻影	胸の想いよ	青雲の人々	遙けき旅愁	遠来の畏友	十二階の灯	オペラ舞台	ドラが鳴る
251	218	185	150	115	80	48	7

装丁 山藤 章 二

小説エノケン

ドラが鳴る

エノケンは、一と月ほどもつづいている気だるい微熱が、一向にひく気配がなく、それに好きな酒も吞めずにいるせい^のか、朝からいらいら苛立^{いらだ}っていた。

軽い風邪^{かぜ}だから、安静にしていればすぐ快^よくなる筈^{はず}だ、という前田先生の診断だったが、今日も往診の後で同じことを言いおいて帰った。

「くそ面白くもねえ！」

前田先生を玄関口まで送って出た妻のよしゑが、茶の間へ戻ってくると、エノケンは苦虫を

噛みつぶしたような顔で、口の中でぶつぶつ呟つぶやいていた。

「おとうさん。風邪だからってバカにしていたら、今にひどい目にあうんだから……」

よしゑが言うと、

「バカヤロウ！ これ以上ひでえ目にあってたまるけえ」

声だけは相変わらず大きかった。

実をいうとよしゑは、前田先生から玄関口で、

「奥さん。仕事は無理です。少し黄痘おうだんができてきているようだし、大事をとって早く入院させた方が、いいような気がします……」

と、小声で告げられていたのだった。

風邪ならとうに治っていい筈だった。熱の方はともかくとして、痔じもひどく悪化していた。両手で体を支えていなければ動けないほど、ひどい痛みかただった。

こんな体では、とても舞台へは出られそうになかった。夫に話せば出る、と言うにきまっているので、よしゑは夫には内証で、今日も二ヵ所ほどあったテレビの仕事を、やっと断わったばかりであった。

だがエノケンは、診断の結果が前と同じ風邪らしいとよしゑが言うと、急に威勢がなくなっ

た。

よしゑが茶の間へ来て坐るのを、待ちかねたように、

「おい。一杯くれよ」

と、珍しく酒をせがんだ。

「あら、もう呑むんですか？」

「たのむよ」

「いけません。先生から、まだお許しがでないんですよ」

「そんなこと言わねえで、これこの通りだ。ホンのちょっぴりでいいよ」

眼の色が、子供のように必死だった。

「困った人ねえ……」

言いだしたら、二度ときかぬ人だった。

よしゑは、しぶしぶ台所へ立つて行くと、以前のようにお銚子ちようしへ半分ちかくお湯を入れ、それに酒を足した。お湯か水でうすめた酒は、この三年来こっそりつづけていた、よしゑだけの秘密だった。

「少しだけですよ」

「うん」

こっくり頷いた顔が、もうニタリと崩れていた。

エノケンにとっては、久し振りに口にする酒だった。盃を持つ手が、異様に顫えていた。ごくりと喉が鳴った。

「ああ、うめえなあ！」

おそるおそる酒を舌の上へのせると、全身を貫くように恍惚感が走った。

「そんなに、おいしい？」

「うん、うめえ！」

水でうすめられた酒が、旨いはずがない。よしゑはいたたまれないような痛みを、胸の奥でおぼえた。

夫に隠れて悪いことをしているような、良心のうずきを感じた。

三杯目の盃を下へ置いて、持ち直そうとした手が、妙にぎこちなく硬かった。

「おい、手が変だよ」

「……」

指が棒のように硬直している。

「あら、曲らないわね？」

「うん」

「少し揉んでみたら？」

「こうかい」

揉んでいるうちに、どうやら元通り動くようだった。よしゑは急にたまらなく不安になってきた。

「おとうさん。矢張り、今日はもう、止した方がいいんじゃない？」

「そうだな」

珍しく素直に頷いて盃を下へ置いた。

「今日は何だか気色が悪いや。おい、おれあもう寝るよ」

「そうねえ。早く休んだ方がいいわ」

鳩時計がちょうど九時をうった。

その時、玄関の方で聞き馴れた甲高い声がした。

「あら、三木さんらしいわ」

「今頃どうしたんだろ？」

エノケンが体を起こしかけていると、もう三木のり平の飄々とした姿が、茶の間の前へ立っていた。

「オヤジさん。今日はひでえ目にありましたよ」

「いやあ、のりちゃん。ごめんよ。この通りのぎまだ。体が動かせねえんだよ。それにね、うちのババアがよ、どうしても休めつきかねえんでね」

「そんなこったろうと思いましたがね、肝心のオヤジさんが来ねえんでしょ。このわたしに昔の浅草がどうのこうのたつて、ちんぷんかんぷんで話になりやせんでしたよ。参りましたね。まったく」

「すまねえ。ごめんよ」

この夜、江東公会堂で、昔の浅草を語るという、エノケンと三木のり平の公開テレビ録画があった。三木のり平は、その録画をすませた足で、市ヶ谷加賀町にある榎本家を訪れて来たのだった。

「で、オヤジさん。具合のほうはどうなんですか。見たところは元気そうだけど、中身がいけねえんですか？」

「三木さん、今日はほんとにすみません。おとうさんはどうしても行くんだってきかなかった

んですけど、やっと宥めすかしてお断わりしたんですの……」

傍からよしゑが口を添えた。

「そうでしたか。とにかくわっしら役者稼業は、体が資本ですからねえ。体さえ元気なら、オヤジさんなんぞ、いくらでも稼げるんだから……」

「こいつ、オレの言うセリフを、みんな言ってしまうやがった。だが、のりちゃんは、いつも元気が良くていいなあ」

気のせいかな三木のり平は、そういうエノケンの声に、何時もの張りがなくなような気がした。

エノケンは子供のように、入院することを嫌っていた。

人一倍寂しがりで、賑やかなことが好きな性質だっただけに、隔絶された密室での孤独が、死ぬほど辛く耐えられなかったのかも知れない。

昭和二十八年。悪性の脱疽にとりつかれて右足指を切断。その後三十七年九月には、同じ脱疽の悪化で右ヒザ上部から切断して以来、長い病院生活を送っていた。

一時は再起不能とまで噂された彼だったが、その都度、不死鳥のように奇蹟のカムバックを遂げてきた。

よしゑはそんな強靱^{きやうじん}で、不屈な夫の再起ぶりを、眼^まのあたりにしてきたせい、今度もほんの一ヵ月余りも入院すれば、必ず元の元気な体になるに違いないと信じて疑わなかった。

それにつけても嫌^{いや}がる入院話を、どう切りだしたらいいものか、考えあぐねていたところなのだった。

病院の方はすでに前田先生が手配ずみで、暮れの二十七日入院という手筈もついていた。

「ね、おとうさん」

「何だい？」

「来年三月はコマ劇場で、春の喜劇人まつりだわね」

「そうだったな」

「今、十二月でしょう」

「すると春のコマまで、あと三月^{みつ}か」

「それまでに、何とか動けるような体にしておかないと、このままじゃとても春のコマは無理よ」

「いやあ、それまでには快くなるよ」

「呑気^{のんき}なことって、若^もし快くならなかったら、どうするの？」